

---

# スクールバトラー - 始まり -

時田一哉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スクールバトラー ― 始まり ―

### 【Nコード】

N0492I

### 【作者名】

時田一哉

### 【あらすじ】

スクールバトラー番外編。恭介と綾羽が会う前の話。俊と綾羽の出会いの物語＊

今日から高校だけど、ろくな奴居ねえだろうな…

やっぱ違う高校にしようとかあよかったか…

いまさら後悔しても遅いか…

仕方ない…

俺は1-Dの教室を開けた。

…なんだあいつ…

教室に入って早々目に入っただのは一人の女子生徒だ。

教室の真ん中でキョロキョロしている。

ただの女子生徒には見えない。

関わりたくない…無視しよう。

俺は開いてる席に座った。

やっぱりクラスの奴微妙だな…

すると、どうだろう。

さっきの女子生徒が近づいてくる。

な…なんで来るんだ…?

「ちよっと、あんた。そこ私の席」

「…は？」

鞆なんてどこにも見当たらないが…

「退けて」

「なんでだよ」

「私が決めたから」

…なんなんだこいつは…

「あ、あのさ…」

俺に話しかけてきた奴が居た。

「なんだよ？」

「さっさと避けておいたほうがいいと思う…」

「……………」

なんなんだ？

「あんた早く避けなさいって言ってるでしょ？」

「……………」

この偉そうな奴…一体なんなんだ？

「…わかったよ…避けりゃあいいんだろ？」

「何よその口」

「は？」

なんだよこいつ。人の口まで気にするのか？

「決めた。あんた退学ね」

「は！？」

マジでなんなんだこいつ！？

「なんで俺が退学なんだよ！？」

「あんたが素直に避けないのと、私に対しての口の聞き方が悪いからよ」

「…あんた誰？」

「あんた知らないの？私は久々津綾羽。この学校に寄付してる久々津グループの者よ」

く…ぐつ？寄付？

「私の家が寄付しなかったらこの学校潰れてるのよ？だから生徒一人退学させるのなんて簡単。先生だって気に入らなければすぐに首に出来るし。」

まあそれぐらい知っておいてからこの学校に来ることね」

…退学か…そりゃあこいつなら出来るな。

まあ早く帰れたかったし、ちょうどいい。

「じゃ帰る」

「何言ってるんのあんた」

「俺退学なんだろ？」

「それはそうだけど…」

「なんだよ？」

「退学じゃ面白くないじゃない…」

…面白くないって…面白い面白くないの問題じゃねえだろ…  
「…そうね…」

綾羽は深く考えて、そして言った。

「あんた私の執事になりなさい」

「は？なんだそりゃ。執事？なんでだよ」

「いいからなりなさい。メイドでもいいのよ？」

めちゃくちゃだこいつ…

「もう本人の了承いらない。あんた私の執事決定ね」

「ちょ！？」

「あんた名前は？」

「…片岡俊」

「じゃシューね」

「…シュー？」

「俊だからシュー」

………

「じゃああんたの席隣ね」

綾羽はさっきの席の隣を指した。

そこにはすでに人が座っている。

「つてことであんた席ずれて？」

「…わかりました…」

素直にずれるんだなやっぱり…



「あ、シュー」

「あのさ、そのシュークリームみたいなあだな止めろよ」

「いいじゃない。美味しそう」

「俺はお前には食われたくない」

「まあ、それは放っておいて、リンゴジュース買ってきて」

「は？パシリかよ」

「はい！行って来い！！」

…むちゃくちゃだ…



「つたく…なんで俺が…」

俺は自動販売機に小銭を入れるとリンゴを押した。

「…はあ…」

昼以外自動販売機禁止だが…俺が仕留められるんじゃないぞ？

「おい。自動販売機は昼からだぞ。何してる」

「……………」

やっぱり先公来た。

「これは訳がある」

「何の訳だ？」

「…久々津に頼まれた」

「久々津！？…そうか、今あったこと言うんじゃないぞ」

先公はそう言って走っていった。

久々津ってやっぱすげえんだ…

「言うも何も名前知らねえし…」



だいぶ遅くなったな…

「遅いシュー!!!」

「…先公が来たからちよつと遅くなったんだよ」

「先生？誰よ」

「名前は知らん」

「そう。次そうゆうことあったら名前聞いておきなさい」

「………」

「リンゴジュース」

「ん」

綾羽はプルトップに指をかけて開けると、美味しそうにコクコクと飲んだ。

「やっぱりジュースはリンゴよね」

「…ジュースって子供かよ」

「何か言った？」

「別に」

「そう。なんかお菓子食べたい。ポッキー」

「おい。購買はまだ開いてない」

「外行けばいいじゃない外」

「…はあ…」

休み時間もう終わる…

俺は急いで近くのコンビニに行くと、ポッキーを買って戻った。さすがに元陸上の俺が早く行っても授業は始まっている。

ガラガラッ！

「お前！授業は始まってる！何していたんだ!？」

「…外にポッキー買いに行ってた」

「外にポッキー!?!? そんなのは家に帰ってから出来るだろう!?!? そ

れに先生に対して口答えとはなんだっ!!??」

この先公声うぜえ：

「先生」

「な、なんだ。久々津」

「：うるさいです。声のボリューム落としてください。それと、彼は私が頼んだから外に行ってただけです」

「そ、そうか：もう座っていいぞ：」

すごい変わりようだ：

「遅かったじゃない」

「無茶言うな」

「：まあいいわ」

次の時間ポツキーの件は噂になっていた。

「ポツキーなんでいちごじゃないのよ！ポツキーはいちごでしょ？」

「そんなの知らねえよ」

「チョコなんて：ポツキーじゃない：」



こうして綾羽の執事になって、一年が過ぎようとした。

「はあ：寒い：」

「しゅ、シュー」

「なんだよ朝っぱらから」

「なんかそんなこと言われたら：やっぱり止めなくなる：」

「何が？」

「まあいいわ。せっかくの物が無駄になるわ。はい」

綾羽は俺に箱を渡してきた。



「義理だからね。これはまあ、いろいろ私の為に働いてくれたし…」  
そうだ、忘れてた。今日はバレンタインデーだ。

「義理でこの大きさって…普通じゃねえ…」

「何よ！ いらないの！？ せっかくあんたに誰もあげる奴がいらないだ  
ろうなあっと思」

「一度出してきたもんを引っ込めるなよ」

「あだ名がシューの人にぴったりのチョコシュークリームだから」  
なんか腹立つっ…

「4個入ってるから」

「これ本当に義理か？」

「そうよ」

素で言いやがったこいつっ…  
金持ちはちげえ…



よっしゃ。

今年は奴と違うクラスだ。

俺はまた2-Dで、奴は2-Bだ。

隣ってすごい気になる…

「…2-Bか…」

隣の黒ぶち眼鏡気の毒だな…

綾羽と同じクラスだし…



あ…こいつは…

今年の執事<sup>げぼく</sup>。

…まさかあの時隣にいた奴が今年の餌食だとは思ひもしなかったな…

って言うか自動販売機でリングジュースってこれ絶対綾羽だろ…

「…なんだよお前」

いつの間にかそいつは俺を見ていた。

「へえ…気づいてたんだ？優秀だね…あんたが今年の綾羽の執事。確かにクソ眼鏡だよ。隣のクラスまで聞こえてた」

「で、お前はなんだ？」

なんかかなり警戒をしてるな。

なんでそんなに警戒してるのか…

「あんまり名乗りたくないけど、俺は去年の綾羽の下僕。片岡俊、よろしく」

…こいつ今、噂通りこいつ普通だなって思ったな…

「お前か、去年の下僕」

「俺は去年綾羽と同じクラスで、ボーっとクラスの奴の微妙さを思っていたら、声掛けられたんだよ奴に」

「あつそ。そりゃあ、お気の毒にな」

こいつ気の毒に思ってたねえ…

「あんたもだよ。あんたのクラスに聞いたが、教室のドア開けて目が合って、下僕になったんだろ？」

「あれは失敗だった」

こいつも俺みたいに可哀想だ。

「アホだな」

俺みたいに、さ。

「そう言えばあんた生徒会長だっけ？誰もやりたがらなくて、頭良  
いあんたにすぐ決まった生徒会長」

「そうだがなんだ？何しに声掛けてんだよ。おかげで綾羽にたっぷ  
りと怒られる」

：俺もよくあった。

わかる：

「そりゃあ、お気の毒にな」

まあ気の毒には思わねえが。

「じゃあなまた会おう」

また会う。

きつとこいつは綾羽に今の事言うんだよ。



「おゝそゝい！！！」

教室に居ても聞こえてくる声で言った。

「仕方がねえじゃねえかよ。ちよつと話してたんだからよ」

「誰とよ？」

「お前が良く知ってる奴だよ」

「良く知ってるって：誰？」

「片岡俊」

また面倒になる。

まあ：いいか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0492i/>

---

スクールバトラー - 始まり -

2010年10月15日01時30分発行